

令和元年6月10日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02606

研究課題名（和文）医療・心理・教育におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用

研究課題名（英文）Establishment of Analytical Methods for Narrative Data in Medicine, Psychology, and Education and Their Application to Literary Studies

研究代表者

奥田 恭士（Okuda, Yasushi）

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：10177173

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、（1）ナラティブ・データの分析手法の確立に向けて、物語論・文体論・ディスコース分析から援用した分析手法を統合・発展させ、手法の改善と精度向上に寄与したこと（2）文学研究を認知科学や医療と関連づけることにより、少子高齢化社会において文学が新たなひとつの貢献をなし得る点を示したこと（3）本研究を通して非文学テキスト分析から得られた手法は、文学領域においても一定の有効性を持つ点が確認できたこと、の三点である。これらの成果は、本文に記載の二つのシンポジウムおよび本課題の総括を目的として発行した『研究成果報告書』で公表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に、「ナラティブ」を軸とし、認知科学や医療に対する文学研究の有効性を明らかにした点、第二に、分析手法の汎用性の確認と精度向上により、領域を越えた有用性を提示できた点、である。また、社会的意義としては、第一に、文学研究がこれまで直接的に関わってこなかった医療等の分野への貢献が期待され、その社会的還元が見込まれる点、第二に、少子高齢化していく社会的状況のなかで、本研究が今後重要な役割を担う可能性を示した点、が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：Our achievements in this research project can be summarized as follows. First, by integrating a variety of textual analytical methods such as narratology, stylistics and discourse analysis, we have improved and refined our textual analytical procedures for narrative data. Second, by showing that literary studies are interconnected with cognitive and medical sciences, the current study has demonstrated one way in which literature can make a new contribution to our rapidly aging society. Finally, the findings obtained through the analysis of non-literary texts demonstrate that these methods could generate significant findings in the field of literary studies as well. These results were reported at two symposiums hosted by Japanese Association of Qualitative Psychology and The Japan Association of International Liberal Arts and through the publication of the research achievement report subsidized by the current grant.

研究分野：フランス文学・物語論

キーワード：多面的ナラティブ分析 物語論 文体論 ディスコース分析 健康科学 臨床心理学 発達心理学

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した平成 28 年度(2016)において、医療・心理・教育におけるナラティブ研究は、前研究時点よりも更なる進展を見せていた。まず、医療分野では、NBM(ナラティブ・ベイスト・メディスン)への関心が、アメリカ国内だけではなく、ヨーロッパや日本でも一層高まっていた。フランスでは、NBMの提唱者であるリタ・シャロンが、パリ・デカルト大学(2014)で招聘講演を行い、これを契機に、主著書『ナラティブ・メディスン』のフランス語訳(2015)が初めて出版された。また日本では、第 20 回日本緩和医療学会の招聘により、リタ・シャロンの初来日講演が実現し、同時に聖路加国際大学でワークショップが開かれている(2015)。

次に、NBMとは歴史的背景を異とする心理臨床分野においては、「ナラティブ」を軸とし、医療との連携も視野に入れた協同の試みが、雑誌『N:ナラティブとケア』の継続的刊行(オンコロジー、臨床社会学等の特集)により、その後も活発な展開を見せていた。また、教育分野では、『ナラティブ研究の最前線 - 人は語ることで何をなすのか』(佐藤彰・秦かおり編 2013)を一例とし、さまざまな教育現場・臨床現場において、「語ること」の実践例が具体的な形で示され始めていた。加えて、本研究の前身である「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立」もまた、これらの進展に寄与したものと自負する。このように、「ナラティブ」というキー概念はますますその重要度を増しており、本研究をスタートさせるに際して、その研究環境は相応の整備が行われていたとすることができる。

しかし、一方で、「ナラティブ」研究の理論、手法、データ解析は、医療・心理・教育の領域では徐々に協同的なものへと移行しつつあるのに対して、文学研究の分野では、手法の汎用性への認識がそれほど深まっていないという現状がある。文学領域の研究者は、医療現場の実態に、これまであまり直接的な関わりを持ってこなかった。その意味では、文学研究の社会的還元と新たな研究手法の展望にまでは、いまだ至っていないと言える。「ナラティブ」を軸とする包括的な視点に立つとは、研究を社会に還元するというだけではなく、文学研究の可能性を模索するという点でもある。本研究は、この点に、当初の最大の背景を持っている。

2. 研究の目的

本研究は、先に助成を受けた挑戦的萌芽研究「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立」(平成 25 年度～平成 27 年度)の発展的研究である。これまでの研究では、ナラティブ・データの汎用性を検証することに焦点を当て、データの収集とその分析を中心として分析手法の確立に努めた。その意味では、治療と効果に主眼のあった「非文学テキスト」に文学的視点を導入するという新たな可能性を見開いてきたと言える。この点において、物語論・文体論・ディスコース分析から援用した分析手法を更に統合・発展させ、より精度の高い分析手法を確立することが、本研究の第一の目的である。

前研究の過程で浮上してきたのは、文学研究の社会的還元という課題であった。「ナラティブ」をピボットとし、どのような方法で文学研究と医療を関連づけることができるのか。データ収集とその分析において、医療現場に寄与しうる有効なアプローチを模索すること、この点が本研究の第二の目的となる。

本研究の第三の目的は、前研究で構築したナラティブ分析の手法を、文学研究に応用するという試みである。これは、「非文学テキスト」(医療に関わるインタビューなど)への文学テキスト分析手法の適用とは鏡面对立をなす。この一見相反する課題は、「非文学テキスト」の分析から得た手法を、文学研究に再導入することによって、新たな文学研究の可能性を見出すという意味を持つ。このため、本研究の第三の目的を「文学研究への応用」とした。

3. 研究の方法

研究の第一段階として、まず医療・心理・教育等の各分野における先行研究を、前研究で扱った主要な分類に沿いながら行い、ナラティブ分析の援用例を中心に、テキスト分析の手法がその後も各分野でどのような形で発展しているかについて調査した。医療におけるナラティブ研究の理論・実践に関してその後刊行された専門書や、心理・教育等の専門雑誌、文体論・物語論・ディスコース分析に関わる専門論文が対象となる。一例としては、リタ・シャロンの主著書『ナラティブ・メディスン』の英語版(オリジナル)と、その日本語訳やフランス語訳の対比的な再読、リタ・シャロンの新刊(*The Principles and Practice of Narrative Medicine*, 2017)の精読等である。また、「背景」でも言及したが、本研究期間に続刊となった『N:ナラティブとケア』では、それぞれ、看護実践(2016)、オープンダイアログ(2017)、ビジュアル・ナラティブ(2018)の特集を引き続き読解した。更に、本研究では、新たに認知文体論のアプローチを加え、キャサリン・エモットの主著(*Narrative Comprehension*, 1997)を中心として、その後刊行された論考等を精査した。

研究の第二段階では、先行研究で検討した問題点に留意しながら、ナラティブ・データの収集を行った。データ提供とその分析は、各自の視点から共同研究者により継続して実施されている。また、これと併行して、本研究グループが検討してきた分析手法をより精度の高いものにする目的で、各専門分野での研究発表だけではなく、他分野との協同を目指す意欲的なシンポジウム企画に取り組んだ点を強調しておきたい。とりわけ、後述する二つの学会シンポジウム(日本質的心理学会、日本国際教養学会)は、本研究を遂行する上で不可欠な試みであった。

研究の第三段階では、研究発表やシンポジウム前後のディスカッションを含め、これまでの作業行程を総括する目的から、『研究成果報告書』の発行を企画し、その準備プロセスにおいて、研究者相互の意見交換を積極的におこなった。対象となる分析事例の提示と検討、新たに加えるべき分析対象の模索など、それぞれの提案にしたがって、議論を深めた点を付記しておく。リタ・シャロンやキャサリン・エモットが言及する医学的回想、語り手の問題と密接な関連を持つイシグロ・カズオなどが一例である。また、前研究で試みた事例に関しても、その分析手順に着眼し、分析のプロセスにおいて検討すべき問題点の抽出を試みた。これまでの分析事例を振り返り、それらを検証することにより、ディスコース分析や文体論、物語論から援用する分析手法の精度確立に務めた。

4. 研究成果

本研究の成果として、(1) ナラティブ・データの分析手法の改善と精度向上 (2) 医療との関連づけによる文学研究の新たな可能性の展望 (3) 文学研究への応用による分析手法の模索、の三点が挙げられる。以下項目ごとに要点を整理する。

(1) ナラティブ・データの分析手法の改善と精度向上

当初の目的のひとつであるナラティブ・データの分析手法の確立に向けて、以下の成果二点を挙げておきたい。

第一は、研究グループ全体に関わる主要な活動であり、分析手法の汎用性を他分野との間どのように共有していくかという「協同」の成果である。2017年9月9日、日本質的心理学会第14回大会において、研究代表者および研究分担者全員の企画によるシンポジウム『多様なナラティブ・データ分析手法の可能性を問う - 質的心理学と文学・文体論との邂逅 -』（首都大学東京荒川キャンパス）を開催し、分析手法の新たな可能性についての報告と問題提起を行った。質的心理学分野の研究者との質疑応答を通して活発な議論が展開されたことから、本研究課題に対する関心や期待度の高さを再確認すると同時に、今後の課題遂行に対する多くの貴重な示唆が得られた。

第二に、これらを総合する共同の成果発表として、奥田恭士編『医療・心理・教育におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用』（平成28年度～平成30年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書）を、平成31年3月に報告冊子の形で発行し、関連機関に配布した。本報告書では、内田勇人（健康科学）、井上靖子（臨床心理）に加え、本研究から新たに加わった保坂裕子（発達心理）の各氏が、語りに関する独自の視点を提示している。また、糟屋美千子（ディスコース分析）は、分析過程の振り返りから分析手順に着眼し、奥田恭士（物語論・フランス文学）、寺西雅之（英語文体論・物語論）は、「文学テキスト」と親近性を持つ「非文学テキスト」（医学的回想）を対象として分析を行った。これらの論考は、ナラティブ・データの分析手法の改善と精度向上に寄与し、他分野からのフィードバックを含め、今後の更なる展開が期待される。

(2) 医療との関連づけによる文学研究の新たな可能性の展望

文学研究と医療との関連づけは、前研究の成果のひとつであった。ナラティブ研究において、文学が担うべき具体的な責務を模索することが、本研究の第二の目的である。これに関連する成果としては、以下の二点が挙げられる。

第一に、2018年3月10日、日本国際教養学会第7回全国大会において、研究代表者・奥田恭士と研究分担者・寺西雅之によって企画・立案したシンポジウム「文学は医療に貢献できるか～物語・文体・認知の視点から～」(鶴見大学鶴見キャンパス)を開催した。このシンポジウムの新規性は、科研グループが招聘した小比賀美香子氏(岡山大学医学部総合内科学講座助教)の基調講演により、医療現場におけるナラティブの意味と活用例について具体的な問題提起がなされたあと、それを軸として科研グループから奥田・寺西、それに奥聡一郎・関東学院大学教授を加えて、物語論および文体論の視点から共通テキストおよび個別テキストに関わる具体的な分析事例を提示した点にある。とりわけ小比賀氏は、先に述べた聖路加国際大学でのワークショップに参加しており、その内容についての言及は示唆的だったと言える。異なる専門分野研究者により構成される当該学会において、多彩な議論が展開され、本課題にとって有益なシンポジウムとなった。

第二に、このシンポジウムを契機とし、研究代表者・奥田恭士と研究分担者・寺西雅之は、小比賀美香子(臨床内科学)、奥聡一郎(文体論)両氏とともに、「文学は医療に貢献できるか：物語・文体・認知の視点から」(2019 共著)を、『JAILA Journal』第5号(日本国際教養学会研究誌)に掲載し、新たな研究の方向性を提示した。文学と医療の関連については、それまで、奥田恭士が「ナラティブ研究の可能性 - 文学と医療をどう結ぶか - 」(『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第19号、2017)、寺西雅之・内田勇人が「ライフレビューに関する文体論的考察 - 介護老人保健施設入所者の事例より」(『JAILA Journal』第3号、日本国際教養学会、2017)の各論考で考察している。本研究において、文学と医療との関連づけが一層明確となり、文学研究に新たな社会的還元の可能性を見出した点は、大きな成果のひとつである。

(3) 文学研究への応用による分析手法の模索

第三の目的である文学研究への応用に関しては、以下の成果二点を挙げておきたい。

第一に、非文学テキスト分析から得た知見を、文学テキストへ再導入するという試みである。研究代表者・奥田恭士は、「バルザックの「代理的な経験」はどこにあるか？ - ヘンリー・ジェイムズの視点から - 」（『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第20号、2018）において、非文学テキスト分析研究から抽出したいくつかの概念、とりわけ「代理的な経験」(vicarious experience)という概念が、文学テキスト分析にも応用でき、分析上有効な視点のひとつである点を指摘した。また、研究発表「ナラティブ・メディスンはバルザックとリンクできるか - 科研課題を通して得たいくつかの視点 - 」（バルザック研究会 2018 年度合同研究会、2018 年 06 月 02 日、獨協大学草加キャンパス）では、これまでの科学研究の成果を、専門の文学研究分野へフィードバックするという試みを行った。

第二に、認知文体論を軸とし、「医学的回想」を対象とする新たな分析手法を提示した。研究代表者・奥田恭士は、前掲『研究成果報告書』の論考（「語りの主体と客体を示す表現の相関について - *Le Scaphandre et le Papillon* の分析を中心に - ）において、「非文学テキスト」（医学的回想）が「文学テキスト」分析にとって有効な要素を備えている点に言及し、言語学と認知科学を結ぶ新たな文体論的手法を模索した。また、研究分担者・寺西雅之は「文学と医療をつなぐ文体論の役割 - *Brain on Fire* の分析を通じて - 」（同『研究成果報告書』）で、医学的回想に見られる認知と文体の緊密な関係について論述している。

以上、非文学テキスト分析により得られた手法が、文学領域においても一定の有効性を持つことが示され、今後更なる文学研究への応用につながりうる点を確認できた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計18件)

小比賀 美香子、奥田 恭士、奥 聡一郎、寺西 雅之、「文学は医療に貢献できるか: 物語・文体・認知の視点から」、『JAILA Journal』、第5号（日本国際教養学会）、査読有、2019、96-107

奥田 恭士、「『潜水服は蝶の夢を見る』に何を讀むか - 偶然、認知、転記 - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第21号、査読有、2019、219-228

糟屋 美千子、「ライフストーリーにおける考え方の枠組み - 児童養護施設経験者の語りのディスコース分析 - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第21号、査読有、2019、41-60

保坂 裕子、「女子高校生にとっての友人関係の意味づけ方についての検討: グループインタビューにみられる多声性に着目したナラティブ分析をもとに」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第21号、査読有、2019、1-8

奥田 恭士、「語りの主体と客体を示す表現の相関について - *Le Scaphandre et le Papillon* の分析を中心に - 」、奥田恭士編『医療・心理・教育におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用』（平成28年度～平成30年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書）査読無、2019、79-99

内田 勇人、「特別養護老人ホーム入所高齢女性における語り - 認知症者に対する回想法（ライフレビュー）調査を通して - 」、前掲報告書、査読無、2019、37-46

寺西 雅之、「文学と医療をつなぐ文体論の役割 - *Brain on Fire* の分析を通じて - 」、前掲報告書、査読無、2019、1-20

井上 靖子、「臨床心理学における事例研究の意義について」、『前掲報告書、査読無、2019、21-36

糟屋 美千子、「ディスコース分析における手順と視点 - ライフストーリーの分析過程の振り返りから - 」、前掲報告書、査読無、2019、47-65

保坂 裕子、「未だ物語でないものから - ナラティブ研究の可能性を探る - 」、前掲報告書、査読無、2019、67-78

奥田 恭士、「ライフレビューの Summary に関する物語論的考察 - 介護老人保健施設入所者のもう一つの事例 - 」、『JAILA Journal』、第4号（日本国際教養学会）査読有、2018、62-73

奥田 恭士、「バルザックの「代理的な経験」はどこにあるか？ - ヘンリー・ジェイムズの視点から - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第20号、査読有、2018、153-164

寺西 雅之、金谷 和香、鎌田 那奈、竹野 朝美、「英語学習教材としてのジェイン・オースティン - *Sense and Sensibility* の複数のテキスト分析から - 」、『JAILA Journal』、第4号（日本国際教養学会）査読有、2018、97-108

内田 勇人、袁 泉、井上 靖子、篠原 光児、「高齢者大学受講者における精神的健康度の実態とその関連要因」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第20巻、査読有、2018、53-60

奥田 恭士、「ナラティブ研究の可能性 - 文学と医療をどう結ぶか - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第19号、査読有、2017、153-167

寺西 雅之、内田 勇人、「ライフレビューに関する文体論的考察 - 介護老人保健施設入所者の事例より」、『JAILA Journal』、第 3 号 (日本国際教養学会) 査読有、2017、15-26
内田 勇人、「介護老人保健施設入所高齢者に対するライフレビュー介入の試み」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第 19 号、査読有、2017、21-26
保坂 裕子、「女子高校生を対象とした友人関係についてのグループインタビューのナラティブ・アイデンティティ分析」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』、第 19 号、査読有、2017、53-61

〔学会発表〕(計 12 件)

奥田 恭士、「ナラティブ・メディスンはバルザックとリンクできるか - 科研課題を通して得たいいくつかの視点 -」、『バルザック研究会 2018 年度合同研究会 (2018 年 06 月 02 日、獨協大学草加キャンパス、埼玉県草加市)

井上 靖子、「他界心理学の展開 - 心理療法の源泉としての“根源的ナルシズム” -」、『日本心理臨床学会第 37 回大会 (2018 年 08 月 30 日、神戸国際会議場、兵庫県神戸市)

Uchida H: Self-Organized Symposium for the intergenerational communication in traditional cultures between the elderly and children in Japan, OMEP 2018 International Conference, 29th June, 2018, Hotel Clarion, Prague, Czech Republic.

Hosaka, Y. Oral Presentation, "High School students' positioning in friendship narratives", Conference Narrative Matters (2018 年 7 月 4 日, University of Twente, Enschede, the Netherlands)

小比賀美香子、奥田 恭士、奥聡一郎、寺西 雅之、日本国際教養学会第 7 回大会、「シンポジウム：文学は医療に貢献できるか～物語・文体・認知の視点から～」(2018 年 03 月 10 日、鶴見大学鶴見キャンパス、神奈川県横浜市)

奥田 恭士、「ヘンリー・ジェームズが見たバルザック」、『第 40 回岡山英文学会大会 (2017 年 10 月 14 日、岡山大学津島キャンパス、岡山県岡山市) (招待講演)

Uchida H. The Intergenerational Exchanges in Traditional Cultures, 19th Generations United International Conference, Milwaukee, USA. June, 2017

Hosaka, Y., Oral Presentation, "How Japanese adolescents keep their friendships: narrative identity research on high school boys and girls", ISCAR(International Society for Cultural-historical Activity Research) 2017, (2017 年 8 月 29 日, Quebec, Canada.)

Hosaka, Y. Oral presentation, "Friendship in adolescent narrative and reasoning discourse", 6th New Zealand Discourse Conference, (2017 年 12 月 8 日, Auckland, New Zealand.)

奥田 恭士、寺西 雅之、内田 勇人、井上 靖子、糟屋 美千子、保坂 裕子、日本質的心理学会第 14 回大会、「シンポジウム：多様なナラティブ・データ分析手法の可能性を問う - 質的心理学会と文学・文体論の邂逅 -」(2017 年 09 月 09 日、首都大学東京荒川キャンパス、東京都荒川区)

保坂 裕子、「友人関係に関する高校生へのグループ・インタビューにみる性差についてのナラティブ・アイデンティティ分析」、『第 13 回日本質的心理学会 (2016 年 9 月 25 日、名古屋市立大学、愛知県名古屋市)

井上 靖子、「他界心理学の可能性 - <深い覚悟> と <やさしさ> の心理療法論」、『日本心理臨床学会第 35 回秋季大会 (2016 年 9 月 5 日、パシフィコ横浜、神奈川県横浜市)

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

JAILA 第 7 回全国大会報告 (2018 年 3 月 10 日 鶴見大学)

<http://jaila.org/activity/taikai20180310/rep20180310.html>

JAILA Journal Volume 5 (2019)

http://jaila.org/journal/articles/vol005_2019/journal_vol5_2019.html

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：井上 靖子

ローマ字氏名：(INOUE, yasuko)

所属研究機関名：兵庫県立大学

部局名：環境人間学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：00331679

研究分担者氏名：保坂 裕子
ローマ字氏名：(HOSAKA, yuko)
所属研究機関名：兵庫県立大学
部局名：環境人間学部

職名：准教授
研究者番号（8桁）：00364042

研究分担者氏名：糟屋 美千子
ローマ字氏名：(KASUYA, michiko)
所属研究機関名：兵庫県立大学
部局名：環境人間学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：20514433

研究分担者氏名：内田 勇人
ローマ字氏名：(UCHIDA, hayato)
所属研究機関名：兵庫県立大学
部局名：環境人間学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：50213442

研究分担者氏名：寺西 雅之
ローマ字氏名：(TERANISHI, masayuki)
所属研究機関名：兵庫県立大学
部局名：環境人間学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：90321497

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小比賀 美香子
ローマ字氏名：(OBIKA, mikako)

研究協力者氏名：奥 聡一郎
ローマ字氏名：(OKU, soichiro)